

開放経済における技術格差と人的資本の閾値： 中所得国の罍に対する構造変化の理論的枠組み

概要

本研究は、貿易が経済発展に与える影響を、(i) 国際相対価格を通じた比較優位の変化、(ii) 海外技術の吸収および国内イノベーションによる技術進歩、(iii) 人的資本の内生的蓄積と産業構造変化という3つのメカニズムを統合して分析し、「中所得国の罍」の理論的構造を明らかにすることを目的とする。二部門動学的一般均衡モデルより、自由貿易下における生産構造や技術格差の動学を分析した結果、技術吸収能力は初期の人的資本の閾値によって分岐し、模倣依存型成長の下では技術格差は構造的に残存する。一方、イノベーションを導入した場合、定常状態における人的資本が閾値を満たす限り技術フロンティアへのキャッチアップが生じる。また、技術フロンティアの上昇が格差拡大をもたらすが、R&Dへの人的資本配分は閾値を引き下げ、農業生産性の向上は交易拡大と所得増加を通じて技術格差縮小に寄与する。本研究は、中所得国の罍を能力制約として再定義し、人的資本蓄積とR&D配分強化の重要性を示す理論的基盤を提供する。